

提出日：令和 2年 2月 26日

所 属： 獣医 学部 獣医学科

氏 名：新井 佐知子 職位： 講師

I ティーチング・ポートフォリオ

1. 教育の責任（教育活動の範囲）

当大学の学生は将来的に小動物獣医師を目指している者が多く、未だ産業動物獣医師への理解（特に養豚関係）や職業的な意義、やりがいなどが浸透していないことから、授業や実習を通して産業動物獣医師についての理解を深めてもらい、学生に産業動物と産業動物獣医師への興味を持ってもらうこと、ならびに将来の産業動物獣医師の育成を教育目標としている。

産業動物基礎実習（1V）では、産業動物そのものに興味を持たせる目的の実習である。普段触れることの無い牛や馬、豚を実際に触ったり、診療や手術の見学を通して産業動物への興味を持たせる目的の選択実習である。

畜産管理学（3V）では、実際には気軽に訪れることができない養豚場の様子や獣医師の巡回指導についてスライド（もしくは動画）を通して学び、養豚獣医師の仕事内容や、豚という動物の管理の難しさや面白さを伝える選択科目である。

獣医内科学（4V）では主に動物としての豚に焦点を当て、疾病診断や臨床症状、豚特有の群飼育について学んでもらう。

内科実習（5V）では、産業動物獣医師として基本的な豚の扱い（主に保定や採血、注射法など）を学生に学習してもらう目的の必修科目である。

産業動物臨床実習（5V）では、学生に、実際に疾病診断や検査などを考え、時に治療や解剖を行って豚の疾患について総合的に学んでもらうことを目的として教育をおこなっている。

科目名	学科・専攻	必, 選, 自	配当年次	受講者数
産業動物臨床基礎実習	獣医学科	選択	1	145人
畜産管理学	獣医学科	選択	3	143人
産業動物獣医総合臨床	獣医学科	必修	5	162人
獣医内科学実習	獣医学科	必修	5	151人
牧場実習	獣医学科	必修	2	137人
獣医内科学	獣医学科	必修	4	129人
産業動物臨床実習	獣医学科	必修	5	151人

2. 教育の理念（育てたい学生像, あり方, 信念）

【優秀な産業動物獣医師を社会へ多く送り出すことで、日本の畜産業に貢献する】

2010年に宮崎県で発生した口蹄疫では牛と豚の殺処分のため多くの獣医師が宮崎県に集結した。私も豚の殺処分に参加し、実際に作業にあたったが、同じ殺処分のチームの中には豚の扱いが全く分からないと話す獣医師が多く見られた。全国的な豚のコンサルテーション業務を行う獣医師たちの団体でもある日本養豚開業獣医師協会（JASV）からも、毎年のように、豚を扱える獣医師数の不足と就職に関する要望の声が届いており、学内で牛や豚、馬を飼育し、実際に触れて実習ができるこの麻布大学の環境だからこそ、実践力のある産業動物獣医師の育成が重要ではないかと感じている。

豚の扱いを授業や実習で学ぶことで学生は将来の産業動物獣医師のビジョンをより明確にすることができ、進路の選択肢としてイメージすることが可能であると考えている。

3. 教育の方法（理念を実現するための考え方，方法）

前述したが、麻布大学は学内で豚を飼育する施設がある。触れたことの無い動物には学生は興味を示さず、動物が好きだと自負する獣医学生ですら、最初は豚に恐怖心を抱く。しかし、1V 産業動物臨床基礎実習では扱いの比較的簡単な子豚を用いて、実際に触れさせることで恐怖心を和らげ、豚という動物にまずは興味を持つことで、豚に対する探究心が芽生える。内科実習では全員に豚の採血や保定を体験させ、さらに授業では現場獣医師の仕事内容や衛生管理などの紹介をすることで、豚の獣医師の社会的な貢献と役割を具体的に知ることとなる。

アクティブラーニングについての取組

豚の獣医師に興味のある学生は、知り合いのコンサルタント獣医師を紹介したり、企業を紹介し、学外実習へ出している。

ICT の教育への活用

採血などのデモンストレーションは動画で視聴してもらう。

4. 教育方法の改善の取組（授業改善の活動）

①教育（授業，実習）の創意工夫（A～C） A

②学生の理解度の把握（A～C） B

③学生の自学自習を促すための工夫（A～C） B

④学生とのコミュニケーション(質問への対応等)（A～C） A

⑤双方向授業への工夫（A～C） B

※A（十分実施している）B（実施しているが十分でない）C（うまく取り組めていない）

⑥国家試験対策としてどのような取組をしましたか。

3年次（畜産管理学）の授業から、授業内に国家試験の過去問を入れ込み、解説などを加えている。

<p>5. 学生授業評価</p>
<p>① <u>授業評価の結果をどのように授業に反映させましたか。</u></p> <p>オムニバス形式での受け持ちが多いので、私が担当した時間に対しての授業評価の意見は特に無かった。</p> <p>② <u>①の結果はどうでしたか。</u></p> <p>③ <u>②を踏まえて次年度はどのように取組みますか。</u></p> <p>前年通り行う。</p>
<p>6. 学生の学修成果</p>
<p>① <u>学生の成績向上に資する取組を何か考えていますか。</u></p> <p>成績不振の研究室所属学生については、顔を見る度に声をかけ、あまり勉強してなさそうならば国家試験の過去問を、教科書を見てもいいから全部解いてもらい、それを定期的に提出させた。</p> <p>② <u>教育活動によって得られた学生の成果及び学生・第三者からの評価</u></p> <p>昨年の在籍学生は国家試験を全員合格した。</p>
<p>7. 指導力向上のための取組（FD 研究会参加状況）</p> <p>毎回可能な限り FD 研修会に参加している。</p>
<p>8. 今後の目標（理念の実現に向かう今後のマイルストーン）</p> <p>養豚関係に就職を目指す学生を1年に3人作る。（今までは1名程度/年）</p>
<p>9. 添付資料（根拠資料）（※）資料名のみ</p> <p>シラバス及び学生評価（産業動物臨床基礎実習、畜産管理学、産業動物獣医総合臨床、獣医内科学実習、牧場実習、獣医内科学、産業動物臨床実習）</p>